



聖漢紀

全

利 9  
3869  
42



3869  
42

六三七年正月  
室井平藏

秀逸



ワキヨ 約日れ儀式におくふ徳子持  
糸七 地ふも女仙も女むらり麻  
キレ 雲層と云居ひ慈照子凡ち  
セ糸 狭いすゝハ拾子乃か之内  
アノ 尼子女丸丸多仙法の外  
糸七 雲りけんむ本夫ハ雲丸と  
アノ 高人宿子古イあり和  
雲子 帆柱と抱分て足て色付打  
甘イ 雲ふさる所 伴野か事  
ハセヲ 母親結政及是も親の志似  
ヒユ 比丘尼々糸ルと云うぐ大和  
々早 々切の形て曲痛の意を放  
ハス 果く子助さるも母の苦

ヲ子 忍ひ切る之業一疾ハ寐て床リ  
シム 而もせしめて袖さの如き  
官ヲ 後明ハ脊不負て飛同年  
子ヤ ちのりと居てきりり妙業  
カヲハ 細舟の女居りしとすりちれ  
シム 初夜おちや去るは子岩之  
セホ 子延猿の時住て足も彫て  
ヒユ 引舟令きて高と足て飛ル  
シホ 借船とつらりてヒイ。ヒヤ口  
ソリ 存の外寐る新西の人  
フスミ 船様の随分船は肩まいと  
子ヤ 名は後信る子ふせし物有  
ハセヲ 母親ハ妻をあるり思ふ是セ

ハタ 築てもあつて大神じやね  
ヲ子 忍ひ切る之業一疾ハ寐て床リ  
サイ 流石を此の入口に堪忍  
セホ 其のくもを去るよこを法死の  
ウナ 濁世を古が業をへる  
キミ 清くは神ありとて清く  
キミ 清くは神ありとて清く  
ホケ 本とて居る清くは首尾  
ハシ 張合よめて付居る言はじ  
アフ 初でちんたむ大い心  
セホ 淫義はて居る影射たぬ  
サイ 懺悔よめて色吐へ入

二  
芳サ人々来りて肩もんで病もよひ  
ワカぬ丸の玉り角を交はし  
ヤリ病者集りて病のガヤガヤ  
クコ花のるりし伝ありある  
ヒカサ障世々髪ハ禿子送りぬ  
シム状うしのさ娘作病  
ヤリ焼や層塔けりけて病の排テ  
テヤ華をての心葉園よ鉄炮  
ウキヨ熱病ハを不まで未と用で海  
ナツ均陳入乃 終り嘆て忍  
ホダテ<sup>耳番</sup>本書いたまされて病も養生  
ワカぬ子所<sup>ッ</sup>て熱もてをる  
ホダテほいお初たまつていらふ妻れ子

三  
キシ横娘も 姑乃 意  
まじ 志こふやして病ハ離れり  
ワカぬ子所<sup>ッ</sup>て熱も養生  
ヤリ 矢ハ通り釣喰<sup>ハ</sup>飯ハ調<sup>ハ</sup>煮  
イモ田舎大<sup>ハ</sup> 諸<sup>ハ</sup>の 題  
ヤリ 病も玉<sup>ハ</sup> 母も久<sup>ハ</sup> 子もノ<sup>ハ</sup> 病  
サイ<sup>ハ</sup> 人<sup>ハ</sup> 又<sup>ハ</sup> 病<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup>  
タニ<sup>ハ</sup> 病<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup>  
キシ 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup>  
志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup>  
ムメ 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup>  
ケカキ 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup>  
クコ 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup> 志<sup>ハ</sup> 母<sup>ハ</sup>

ホテケつて何と報さるゝ身も  
ヤナ固まらばし侍居と伊集  
ルニ網洗の女房出奔知と之  
キニり烈ぐ流尻乃宮様  
ツヨ道はとやういふも  
シコ痛く吐き出さるる  
タニ地とよ人形持が初辰  
サイ彦上ハまじ此下白蓮  
ニモ始が仏で髪より一際入  
シム時うハよりとまら灯  
ウメうさひが解るこも  
ナヤ伊集女がやが子にて  
サニ侍もうはつふぬて落下リ



イモ... 札ハ... 貴...  
伊集... 女... 侍...  
イモ 醫者も満と持てる前次  
テシ 女の... 祈する...  
ウチ 伏仰する...  
チホ 先妻の位牌持ハ...  
キシ 元と強...  
ヒユ 孫合スる...  
ウメ 後見の時... 秘の眼が...  
ワカ... 祈...  
イモ 元氣の...  
口

与井 肘て後接キ 片方サレ  
シム 仁辨 其の 吾等若ふも  
タシ なたんか日本橋 越前の 顔  
ハス 後切る 枕をいさるも若坊  
ヤシ 山伏が 着る 袷が 込ふ  
ハタ 班猫が 袴や 一の 若坊  
マシ 枕をいさるも若坊  
サイ 三番 奥をいさる 若坊  
キシ 百番 軸 奥をいさる 若坊  
アマ 二人 連袂 後若坊 奥をいさる  
チヤ 我をいさるも若坊 奥をいさる  
アキヨ 約者 後若坊 奥をいさる  
シム 上根 小脇 向く 洞 後



シヤシキ 別業 書 若坊 後若坊  
ハタ 十の 十の 十の 十の 十の  
ハナ 十の 十の 十の 十の 十の  
ム 十の 十の 十の 十の 十の  
ハナ 十の 十の 十の 十の 十の  
ハタ 十の 十の 十の 十の 十の  
アキヨ 十の 十の 十の 十の 十の  
シム 十の 十の 十の 十の 十の  
アキヨ 十の 十の 十の 十の 十の  
ホケ 十の 十の 十の 十の 十の  
セウ 十の 十の 十の 十の 十の  
ヒユ 十の 十の 十の 十の 十の  
ヨキ 十の 十の 十の 十の 十の

アハ あらう月史のあまてあう病  
 サイ 酒務 足るにいらひ伝達し  
 フスマ 富貴之醜よ如く病まを捨ぬ  
 シコ 金湯入抄 湯家小宿 柳  
 アハ 喜いあ大なる其花也ー  
 イモ 引導乃 文盲で女佛  
 セイホ 喜宅へ醫者の足跡おつたる  
 イモ 姑りいああもらさるる  
 リカキ ケタもり門でもさる者梅出い  
 マテ 花綿 なるると 照る因然  
 ケカキ 今約いさ後もあまのあつれ  
 トウ 網慈者とし 運の因し  
 マシ子 折悪く産ル小狸 藤入むる

アア あまの所 筆下 喝で居る  
 シホ 上野五郎より 捨ふ日が多イ  
 ヒユ いろふてさうと 指費がモノ  
 タニシ 大丈夫を眼下とさるりと見  
 シコ 掃ハ葉のぬえさ乃 魂  
 マシ子 夢さうむおはて母親の病ては首  
 ヨキ 花おひいどよる意母がら  
 ニムシ 寺へ詣り性小上するあん坊  
 ヒユ 災を治す女と發法がは遣  
 タニシ 権持子にて下りさう記授し  
 トウ 伽草とゆびがうらうと出ス  
 ケカキ 花子実波子 夢いといえぬ合ぬ  
 アア 天宮がうらう 梅つるもく



善と 善くもいふ能く 誠令二言常  
口上 而交と申り 善法ひしうて  
分チ 二言申りふ首申て 善くも言ふ  
ウチ うちかきかきと申る  
アハ 扇店等 ありて 善くも言ふ  
ヒエ 日分 善くも言ふ 唯我独善  
善ニ 二月八日 善くも言ふ 二言常  
ソリ 善くも言ふ 善くも言ふ  
アワ 善くも言ふ 善くも言ふ  
アツ 善くも言ふ 善くも言ふ  
チヤ 善くも言ふ 善くも言ふ  
タニシ 善くも言ふ 善くも言ふ  
トウ 善くも言ふ 善くも言ふ

善と 始れ及古きと云ふこと  
アア 按之の因又たなり 本義  
ケカキ 善くも言ふ 善くも言ふ  
ワカ 和讃 善くも言ふ 善くも言ふ  
系に 知て 善くも言ふ 善くも言ふ  
ウチ 善くも言ふ 善くも言ふ  
セイホ 善くも言ふ 善くも言ふ  
ワカ 善くも言ふ 善くも言ふ  
サウニ 善くも言ふ 善くも言ふ  
ヨキ 善くも言ふ 善くも言ふ  
タコ 善くも言ふ 善くも言ふ  
シム 善くも言ふ 善くも言ふ  
善と 善くも言ふ 善くも言ふ

サイ 算用まゝに破せりせぬ  
 ツキヨ 運ぶあるは先ふまゝの男  
 ヒユ 日ゆるがまては踏ぬ二代目  
 アハ 空舟折く死ふ母へある  
 イモ 川の男ハもあつてはら  
 ウメ 運の事の時いさうあつた  
 イモ 居るのりもひが物怪の事  
 タシ 大物いゆてはるもまの事  
 クコ 昔あつてはるまの事  
 ヤク 救急者の事いふ事  
 マテ 浦せりまの事いふ事  
 オテ 坊主ハ大師巡りの事  
 キシ ところの事いふ事

サウニ 衣のハいふ事  
 サイ 絞やめて居る事  
 サウニ お場はふつとせぬ人相見  
 クコ 足踏つて 跡を付ける  
 カキ 踏踏でかまひあつてはる事  
 イモ 川の事いふ事  
 サウニ 侍がまゝの事いふ事  
 イモ いんたんとて物をさす事  
 ツキヨ 跡いふ事  
 クコ 喰つた事いふ事  
 カキ ケレた事いふ事  
 アフ あつた事いふ事  
 サウニ 誘ひ人かゝる事いふ事

ハタ 終の明と賣る候がせえ  
アヲハ 喜まき馬入てぞう嘆かめ  
丁川 何喰りわ新替り小徳の菓  
昇山 嫁のより定判しうか梅屋り  
ハタ <sup>二百番</sup>八卦入てゆるるまうと 咏  
アヲハ <sup>アブナ</sup>酒重きハあひまの端とまふ  
ホケ 法花へもるハ怪家と仕てくら  
半工 花房り何ぞもまきちとあはは  
ハス 恥合つてる赤糸の松山  
三上 下屋の骨切ちが下踊り  
ヨキ 結し目柄賣き仕の借跡  
ケカキ 結り喜小垣のよのでまがけぬ  
ケコ 卯寅のよの、疑の立陣

イモ いまのじと目流の網  
ササヒ 在り若娘しがるおもまう云  
ハタ なる月柄をて集んで再ん  
今々 むごうふ二面木清の流出  
キシ 和人ふいてる老態たは侍 捌  
タニシ だましの母房よまは事仕て黄  
ハタ 恥かきまきと大人思ひあは  
ウト 眼し手細教ふる目物さう  
ワカ 知ふて刀やと流るる舟のあ  
アヲハ 欠びむかや昔此丸の出表のを  
ハタ 老む知あふく大人の相  
アト 乳母がふ小徳の下推めも下推  
アト 程程大さんかえは書おる

マテ 秀也 足子 小多代 地謡  
タシ 達者 光て 光り 光り 光り  
ムメ 子の 門侍 逆惑 逆惑  
ヤク 光り 光り 光り 光り  
ハタ 暖ま 暖ま 暖ま 暖ま  
ハユ 暖ま 暖ま 暖ま 暖ま  
マテ 松が 寺の 飯時  
ハユ 鼻 柱 接 温泉  
キシ 鬼門 法 隅 隅  
ハス 灯を 指で 指で 指で  
ハス 公家 の 峯 石 石  
ハス 公家 の 峯 石 石  
ハス 公家 の 峯 石 石  
ハス 公家 の 峯 石 石

フスマ 松の 馬 馬 馬 馬  
ヨキ 波 あり あり あり あり  
コタ 波 あり あり あり あり  
キシ 美 あり あり あり あり  
オキ 美 あり あり あり あり  
ナク 美 あり あり あり あり  
サイ 美 あり あり あり あり  
ニキ 美 あり あり あり あり  
ヒユ 美 あり あり あり あり  
シキ 美 あり あり あり あり  
子々 美 あり あり あり あり  
ニキ 美 あり あり あり あり  
オキ 美 あり あり あり あり

ハス 鉢巻らうせ筋あ城す  
 コウ 念地ふい縛り指の委実筋  
 三百五十番  
 イモ 念ひふい名をばりくと  
 ツメ 内は尾隙で同て眼賢  
 一テ 妻乃一及多隠見せ能  
 ハユ 念地ふあり玄園小指袋  
 ハス 咄——御よきあつこ妙  
 イモ 祝ひ申——く文盲小足  
 ヤキ 化振部を凡の末に念えは漆  
 ハス 念地ふと念地ふかつこ家入  
 サイ 念地ふと念地ふと念地ふ  
 タシ 怪をふ二階と念地ふは念地ふ  
 コト 念地ふ同く念地ふ乃乃念地ふ

ハス 念地ふ起キ智人修らんと修り念地ふ  
 マテ 毎年一室う出たて念地ふ  
 セホ 養育念地ふ長る物茶  
 キシ 念地ふ念地ふと念地ふ人持  
 シウ 員念地ふ念地ふ念地ふ  
 サイ 念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ  
 ヒキ 念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ  
 ハタ 念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ  
 クキ 念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ  
 アフ 持念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ  
 タシ 念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ  
 ナウ 念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ  
 ホウ 念地ふ念地ふ念地ふ念地ふ

イモ一強当子候と終り喰ふ  
某情おほいふ下らん終り赤い  
ハス孤志あはるり妻らとよす  
身妻の厚青は刀とまきかり  
ウナうすの一家とちのくき候  
をい 紫の小娘成立も仕候と  
イウごちらあまき候くはる長  
アマふは合宿分たいきあ家  
ナツ何ぞいぬハ節も乃礼  
エシも代もあまのくはる新回屋  
マテあきまもるがむちあ業之  
アハ紫肉若大坂は城真ま汁  
アフあぶるく清くあの花は

アマ文がぐり涼しい風ハ待ちから  
シム波あびんとむつこ入舞  
ヤク揚弓ハふさふさ却念怒ハ節  
ハタ羽子さるり愛さのとお景よ  
ヨ子大助と定矩小親父ねつい歌  
クユくまりのさあぬるりうまてや  
コキヨ 髪先手のたくりく光るよ月夜  
キシ 水とどろくと洞猿  
ヒカサ 平舟子あまのあせせしあめ云ト  
ヒユ 菱川西川湯具のさし切  
タシ 具形ハ解は休てあぐ上細工  
サイ 沼きざんあぐ一ナ重無うち  
ウチ 伏向くある又乃逸決

何ヲおぼめての最善ニ見物老更持  
 ハス 咄次事あり筋成立合  
 二并 火小火とあけて世居逢ぬ  
 ナヤ 地獄うら世居ふくく居る  
 オキ 之ひまゐる時ふか焼も藤入が  
 シム 尻乃らそとむき舞入の依  
 二并 肘括懐こちきりどきり向ひ  
 アフ あつこく焼く一子別と見合  
 某 涉流るるへぬおじやと仏性  
 ハタ 濱仕あり神棚を張込  
 分々 毒吸てるがり味けむり  
 十ッ 舌はりの知り能くし大ま  
 赤テ 括知の及名のオホ代舞

イモ 吳足が裾小も信まじり  
 二并 百葉の敷と足小ある御五人  
 一テ ぬんおとる興へ多物進け  
 二并 侍の内なる影とくふがハ  
 フカ 伏乃りる梯信りれむつり  
 ハス ぬと仏りむるハ世造作  
 二並 出まを眼むらり味小上根を  
 ナヤ 知を恵の付人か存と吞込  
 セイホ 船双ハま地づく小帆うま  
 ウチ 巾ニともスニとも茶釜放さぬ  
 ナヤ ちやいとかがれてきって納る  
 尋ム ころへ男之味のきまハ唐川舟  
 ナヤ 死を乃赤と焼もので埋

半工 母親はあそい合点のりやふ  
サニ お坊もいりし 醫者の考<sup>ニエ</sup>所  
キン 金襴ツイ 撥桐<sup>シユロ</sup>が 西<sup>カ</sup>きい  
アハ 火燈に丈夫の 灯<sup>ト</sup>の 計<sup>ハ</sup>の 心  
ハス 箒振<sup>コ</sup>成ると 素<sup>コ</sup>敷<sup>シ</sup>引<sup>シ</sup>籠<sup>ロ</sup>  
チヤ 父乃 律<sup>キ</sup>美<sup>ズ</sup>く 病<sup>ハ</sup> 信<sup>ウ</sup>山<sup>シ</sup>  
ヤホ 脊の<sup>ハ</sup> 燈<sup>ハ</sup> 妹<sup>ガ</sup> 毛<sup>ハ</sup> 足<sup>ハ</sup> 茶<sup>ハ</sup>  
ニテ 湯<sup>ク</sup> の<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
クコ 口<sup>ハ</sup> 説<sup>ト</sup> と<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
ヤリ 山<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
ニテ マア 中<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
百<sup>ニ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
ワカ 山<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>

玄<sup>シ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
キシ 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
フ子 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
トウ 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
セテ 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
クコ 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
ニク 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
タニシ 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
ウチ 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
ハチ<sup>ニ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
コウ<sup>ニ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>  
ヤホ 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup> 湯<sup>ハ</sup>



サイ 志田がむるといふは  
 ハテ 播磨巡りするが湯泉  
 ソリ そろがよき ぬき方り 侍  
 さい 始れ養の帽子を釘まじし  
 ヒユ 日泊り小僧後で新吟  
 さい 大室の女房もまは仕替ひ  
 トウ 飛んで鏡を軽ひとぬく  
 ゼラ 放し懸籠の氣流の湯子  
 イモ 入り松枝 燧 伝天  
 サイ さびーぶりのふらふら  
 さい 後多切のふらふら  
 コサム 丹心とさんせとふらふら  
 ハス 掃帚 飛んで涼しさと

サニ 妙法のお内ホと母は依り  
 キシ 横娘がふりぬき 赤  
 タニシ 五郎のふらふら 赤  
 イモ 大りき佛 中 信  
 フスマ 落吐増と長丁推し  
 ヨキ 摺目けと樹造の股  
 フスマ 節杖杖則二玉の赤  
 アフ あふびるハニタ親及  
 フスマ 禪がこころにまけ  
 サイ 妙法おのハニタ入の  
 ニキ 夢比路の星より物ら  
 ハタ 夢比路の星より物ら  
 サニ 夢比路の星より物ら

クコ曲帰於弛乞意乃一色  
一ツワ又薩の信長別る流一書  
トウ信の余ツク白に操うけ  
台ヲ抜いせハ子鏡樂月一太戸破  
イモ妹多ク先キ一戻り室引  
サイヤウウの句巻今井能信小  
キシ思多ク邪人てあぬ音書一  
コツ言傳レ豆腐乃氷る九折  
サイ先キ結多キ飛マたよい  
クコ意菊石大切の武士  
一ツワまごサハ信と純一流一越人  
マツ事觸になよま九折流一  
おまげらりが止ミ化流仕立流

ワカカ美多能カ一音の流成格  
サイサ纏サ一浪引一市乃体日  
マハ物比奈に鬼物大物ハカと  
ワカ笑ひあハ一多加持ハける顔  
ムメヤカかカと受て眼を細ハける  
并サ於て困カ多入カ込ぬ幼布持  
マテ流んまカと流カそ多受カ仕る  
シム素あやカつカ馬に流カ立  
ムメむカむカの神カき飯カ焚て居  
四番大尾  
并日カもやカとカ能カ流カハカき酒流カ

冠句集

実さかーしむ白も

色不て沙汰の丙午

券又山も来る古も賞

池プツニアツあらあぶる

筆跡あーぬ矢立雲

ちくくくと

けの字の乃之る川流り

後家松茸葉喰ひ

囁も上戸ふ菜りより

弟履をかーと白ある

大風灰

九品部家へ立外栲

ぬも漢仕といへ共ハ  
抜くとありりよ人がき

又はいか

家名の隆の然らぬ  
酒嗅い口をきりあ  
書物ハおいて清涼  
病て居る

音隠一ツの大借家

出ぬ小使を又一しはる

口へ飛出るめんよるか

ぬれて来る

和人のきり太白あ

かてんのけりぬ二人連

あつちも惚して居る

とてありて

分てきりいせの風

何れでも喰ふ雲月者

而テ後連なり

抱えたり

あふい風もあぬ駕

段の門ト灯がふい

喰ふ夜寝る脾胃虚病

天も地も

吞込之屋之款迎如來

百姓がきりあつち

葱賣ん声厚のあ

山と田

—のぶと賣たまふ家  
狼兔ツマの川尾怪  
祭焚燔と賞い歩け

押つめし

川水あふちあがれり  
命は切りの有る人  
ちとぐ振るふ場遠る春  
戸死の蜘蛛ハる社之

あんぞあろ

端々あつるのも剛い池  
目くらまきで乳母合点は  
田舎のあがハ軒家

皆まのころ

人ハ神より女中さん  
棟梁連れと施主の樂  
神で舞い振るふ神舞  
肩のつかへ—新ちる屋

お—こみ小

幕湯ハ止メ小朱ル始末  
皆碎ふて居ル難言は  
損の程そふ十九文

ちとく

足小身の入る医者能礼  
紐屋能あ川の川馬  
糸りの能能跨馬堂

狸が独い  
伊適夜喚いで居るを食  
浮世の形連の未討察

阿そと安

初うきと持て振ル塔  
笑て女房が後成立  
三味中と合ぬおぼしほん

花小面

皆毛せんと引かづく  
飛こ替ま更かへて日かがく快  
更かさりても又てかけ  
能中親が存度良

いつか後家小あゝ志

雲と海

堂つろく損しとも真ん  
世界成位家様坊主  
免もとしるこ又れ我

くひ遠

女房が扱ひの後季  
おのびのやうなまがり

自由心

親密極の清らたるめい  
所りやうきさらいみち  
養生させぬ事は生場

川次郎

湯の湯に於て此の如く  
隠形の手をふるも  
巡礼小出る長病ひ  
有るはと云ふ能く計

結ぶおまじ

辨日の髪又つてせし  
初めぬ人來ル菊盛  
地黄利月今又つて  
入る聲の入り目がぬ

ツンとが

振袖の出と駕り  
礼の入りは有る一  
やくたいが

初めーこの午の刻  
衣とを持おいせ  
肉のメラぬ出来  
ごうありと

抱人の多い初イの孫  
才へはー漢家へ退  
海ご勝負のハ吐く

これまじ

格あつ出ると羽織  
おふ汁ー八日ハ照  
喰逐させぬ海一毎

今時分

内も皆研入交巡り

妹ハ一人リ目がさくる  
母ハ案づる懐ロ子

ごつくりと

晩小喰ふ後うららる  
編笠であひひらくを  
半丁振へおろす駕  
房り志んどの在冬り  
鼻も五山の桐よ侍

めつらうら

猿の白挽屋志んどの  
喧嘩のせくる口車  
江戸下口も細てが村

おのりおのり

オ、笑止

うごき巻てある雛のほ  
泣よ枕ハハツ流る  
仙るの障子破るむふ

かんませぬ

扱系紙よりききぬ  
頼まれてある控の男  
家円筆解く神隠し

ひつそり

せめく豆磨と喰ふ内  
とらづりの袋のハツ時分  
か子縁の泣け流り水  
首をさぶらハ笑刃の夜



まのど産物ぬ表紙か

白いろり

あまらわら子の子のまを  
ま焼店の府丁づけ  
らんづりやくう流ス水  
入鼻除けしほれ砕

びんと仕ル

枕哉際る江戸の幣  
いやまの退け婦一巾  
能くあまをせいと編  
邪真ふささるる又人張  
廣いろり

面乃取屋が又人口  
後あけてなる去月十  
高費のまいゆ後の常

宅が明く

小使をりふせし者の屋  
鼻ハ助々とお改来  
毎年嫁入させら家

悪いろり

あやことんぬみ屋  
さそひ給うと隣同士

大	大
子	子
麗	麗
橋	橋
を	を
丁	丁
目	目
坂	坂
藤	藤
金	金
喜	喜
七	七

